

博士学位論文審査要旨

申請者 久保田 英助（愛知みずほ大学専任講師）

論文題目 男性セクシュアリティ形成の社会史
—近代日本における性道德と性知識—

申請学位 博士（教育学）

審査員

主査 湯川 次義 早稲田大学・教育・総合科学学術院教授 博士（教育学）（青山学院大学）
副査 水原 克敏 早稲田大学・教育・総合科学学術院教授 教育学博士（東北大学）
矢口 徹也 早稲田大学・教育・総合科学学術院教授 博士（教育学）（早稲田大学）
田代 美江子 埼玉大学教育学部教授

1. 本論文の課題と分析の枠組み

本論文は、日本社会の近代化の過程で作り出された性に関わる「道德」や科学的「知識」に着目し、これらの情報ではどのような「男性セクシュアリティ」が日本人男性の特徴として位置づけられたのか、それらを通じてどのような男性性の形成が行われようとしたのかを実証的・総合的に究明することを目的としている。とくに“買春する男性セクシュアリティ”に着目し、それを形成し発展させた制度的文化的諸要因を明らかにすることに重点をおいている。

なお、セクシュアリティの概念について簡単に触れておくと、日本では1970年代以降に用いられるようになった比較的新しいもので、その概念は必ずしも一様ではない。おおよそ、性にかかわる多様な現象、欲望、イメージ、意識などをゆるやかに包括するものといえる。さらにいえば、従来「生物学的」なものと考えられてきた「性」に関わる諸領域が、社会的・文化的に作られた側面をもつという前提に立ち、研究対象としては歴史的なものに限定すれば、性教育、産児調節、人間形成に果たす役割、さらには本論文が取り上げた公娼制度や廃娼運動などが想定されている。

本論文では、近代日本の男性セクシュアリティの形成とその特徴を究明するための柱として、性道德と性知識の二つを設定している。性道德については1900年代に始まり、1920年代には全国的な盛り上がりを見せた廃娼運動の運動理念を、特に廃娼運動団体「廓清会」が発刊した大衆啓蒙雑誌『廓清』を中心に分析している。性知識については1890年代に欧米から流入し、1910年代以降国民の注目を集めるようになる性科学（セクソロジー）を中心に考察している。さらには、1920年代を中心に流行した「通俗性欲雑誌」を主な分析対象とし、明治後期以降マスメディアとしての地位を確立していく大衆雑誌を通じた啓蒙活動の特徴を明らかにしようと

している。

このように、本論文は近代日本の雑誌メディアを中心とした大衆的な資料から“買春する男性セクシュアリティ”の特質を明らかにしようとすると同時に、さらにそれを同性である“男性の目線”から描き出そうとした。それにより、買春の当事者としての男性だけではなく、買春という社会的問題を眺める男性の特質も検討することが可能となり、その結果近代日本の男性セクシュアリティがもつ本質的な問題を明らかにできるとの視点を設定している。

近代日本におけるセクシュアリティを対象とした先行研究を概観すると、買売春については、公娼制度や廃娼運動、慰安婦問題などの個別研究が数多く蓄積されてきている。本研究の焦点である性道徳や性知識について述べると、性道徳に関しては廃娼運動や学生・生徒文化の研究がかなり蓄積され、また性知識についても開化セクソロジーや通俗性欲学、性教育などの研究が深められてきている。しかしこれら個別研究の大半は、「女性学」の領域でなされたものである。それに対し「男性学」の視点から再検討しようとした点に本研究の特徴がある。さらには、個々の先行研究で扱われてきた歴史的事象を「男性セクシュアリティ」の歴史として統合しようとした点にも特徴があるといえる。

本論文では、“買春する男性セクシュアリティ”と“それを眺める男性のセクシュアリティ”という2側面を明らかにするための分析課題として、①「公娼制度を必要とする思想の特質」、②「廃娼運動が掲げる性道徳の特質と変容」、③「性科学における知識の特質と大衆への浸透」、④「性道徳・性知識啓蒙活動の背後で生まれた新しい文化」の4つを設定している。4つの分析の枠組みの概要を記すと次のようになる。

(1) 公娼制度を必要とする思想の特質

近代日本の買売春の歴史は、1872年のいわゆる娼妓解放令及び翌年の東京府における貸座敷渡世規則・娼妓規則・娼妓規則からはじまる近代公娼制度が中心に位置づいていた。本論文では、この近代公娼制度の特質を明らかにすると同時に、そうして誕生した買売春システムがいかなる議論を通じて「公」の制度として確立し、いかなる形で社会的に受容されていったのかを検討する。日本の公娼制度は、西欧などのように性病管理のための買売春の国家統制という位置づけだけにとどまらないのであり、日本的な家父長制的社会構造のなかで生まれた、固有の買売春のしくみととらえるべきではないか、というのが本研究のスタンスである。

(2) 廃娼運動が掲げる性道徳の質的変遷

公娼制度を当時のすべての人々が受け入れたわけではなく、制度確立前後から反発が起きていた。その中心に位置づくものがキリスト者を中心に展開されたいわゆる「廃娼運動」である。しかし、女性の手による女性解放運動という「女性史」の枠組みでとらえられる傾向が強かったために、廃娼運動の「男性史」としての側面、すなわち、廃娼運動が男たちによって担われた社会運動でもあったことや、廃娼論が男らしさをめぐる問題でもあったことが見落とされてきた。そこで本論文では男性を中心とした廃娼団体「廓清会」の機関紙『廓清』を分析し、男性による男性セクシュアリティ再構築の取り組みの内実と特質を明らかにする。その際、1900年代までの廓清会「前史」、1910年代の「草創期」、1920年代の「隆盛期」、1930年代前半の「転換期」、1930年代後半から1940年前後までの「戦時期」の5つに時代区分し、分析をすすめる。

(3) 性科学における知識の特質と大衆への浸透程度

「開化セクソロジー」や「通俗性欲学」など、近代日本に新しく登場した性科学の特質を、それらの知識がどのような人間性や人間関係を構築しようとして生み出されたのかという観点から考察し、その教育的意義を明らかにする。その際、資料として1920年代を中心に「通俗性欲学」の第一人者として注目を浴びた澤田順次郎が主幹の『性』などの通俗雑誌を用いる。こうした雑誌の特徴としては、①一般市民にわかりやすくするために、民衆意識にそって噛み砕いているという点でより通俗的であること、②さらに重要な点は通俗性欲学者以外の学者や文学者等の論文や読者からの投稿などが見られることである。これらの雑誌が幅広く読まれたことを考えると、専門家以外によって編み出された言説内容から当時流行した性科学の知識の影響を読み取ることが可能と考える。

(4) 性道徳・性知識啓蒙活動活発化の背後で生まれた新しい文化

1890年前後においては、「恋愛」という言葉が登場するとともに、「恋愛」の結果の「結婚」「幸せな家庭」という新しい「家庭」観が形成されたが、その一方で「女学生」が登場し、その不良化も問題となり、このようなセクシュアリティをめぐる新しい事象は常に新聞や雑誌を賑わせた。「墮落女学生」や「モダンガール」などと名を変えながらも、常にその中心は若い女性であった。このように女性による新しいセクシュアリティの表現は社会的関心の中心となり続けていく。新聞や雑誌の記事の中には、事実だけではなく虚実とりまぜて面白おかしくつくられた女性の姿が少なくなかったが、それ故に新しい時代を象徴する女性に対する感情や欲望がリアルに映し出されていたと見ることができる。その意味では、「墮落女学生」や「モダンガール」などは、それまでの社会の規範を破る女性の文化や行動のもつ新鮮さに期待する一方で、それを押さえ込みたいという両面的な男性の欲望が生み出す表象であり、その中に男性のセクシュアリティを読み取ることができると考える。

以上のように本論文は、性やセクシュアリティの問題を男性の形成史という視点から究明しようとする意欲的な研究であり、男性のセクシュアリティに関する言説を、廃娼運動、売春、文学作品などの諸側面から丹念に分析し、その特徴を究明しようとするものである。

2. 本論文の構成

本論文は本文がA4版226枚からなっているが、その目次構成は以下の通りである。

序 章

第1章 近代国民国家の成立と男性セクシュアリティ

1. 遊廓の誕生から近代公娼制度の確立まで
2. 公娼制度をめぐる動向
3. 性文化と性教育の変容

第2章 1910年代における禁欲主義的男性セクシュアリティ形成への動向

1. 家庭内における「性欲」の自己抑制
2. 「廓清会」の成立と男性によるセクシュアリティ改良の取り組み
3. 「墮落女学生」の登場と社会の動揺
4. 性教育論の隆盛と挫折

5. 文教地区における遊郭設置問題
第3章 多様化し変質する 1920 年代の男性セクシュアリティ
1. 1920 年代の廃娼運動全盛期における「廓清会」の理念
2. 女学生文化流行がもたらした新しい男女関係
3. 通俗性欲学の流行とその影響
4. 小倉清三郎による禁欲主義的男性セクシュアリティへの抵抗運動
第4章 頽廢化する 1930 年代の男性セクシュアリティ
1. 廃娼運動から純潔教育運動への転換
2. 頽廢的性文化の勃興と女性の性の商品化
3. 通俗性欲学の社会への浸透
4. 『性』から『優生』への転換
第5章 戦争と男性セクシュアリティ
1. 国家によるセクシュアリティの管理システムの特質
2. 戦時における売買春制度の転換
3. 非常時における男性セクシュアリティの特質
終章

3. 考察結果と総括

考察結果と総括については、本論文に即してその概要をまとめる。本論文では既述のように 4 つの分析課題を設定し、およそ明治維新时期から 1940 年頃までを時系列的に分析したが、それぞれの時代ごとに男性セクシュアリティの特徴には明確な変化が生じていることが明らかになった。そこで以下に、各章の要点を示すことで「男性セクシュアリティ形成の社会史」の概要を示し、本研究の成果を総括する。

第 1 章「近代国民国家の成立と男性セクシュアリティ」では、幕末・明治維新时期から 1900 年代までの近代化過程における、日本人のセクシュアリティの急激な変容を分析した。

幕末維新时期という近世から近代への転換の時代において、文化の西洋化の流れは人々の娼婦観にまで及んだ。その特徴は、「身持ち正しい女までもが、売られて強制的に売春している」という伝統的な日本の娼婦観と、欧米から流入した「身持ち悪い女が、自らすすんで売春している」という娼婦観とが対立し、その違いが人々の中で意識化された点にある。そして、西洋的娼婦観への転換が生じ、明治新政府が先頭に立って欧米諸国と同様に自らの意思に基づいて売春を行う女性像を日本において新しく作り出そうとした。こうした娼婦観の転換が近代化の一環として捉えられた理由は、娼婦を自らすすんで売春する「特別な女性」というイメージを定着させることにより、娼婦と一般婦人との間の境界線を明確に設定し、欧米同様に効率的に娼婦の管理を行うことが可能となると考えられたからである。1872 年の娼妓解放令は人身売買の禁止を明言した。しかし、「娼妓」＝「牛馬」と位置づけることで欧米の娼婦観を日本に組み入れようとし、「娼妓」は法令上一般婦人と明確に分離され、被差別対象として再配置された。

近代日本において娼婦の身体の管理は、強制的な性病診断という形になって具体化された。この診断は、女性としての人格の尊重をないがしろにした内容であった。しかし、欧米諸国に

よってもたらされた強制的性病診断は、国家の富強のためには欠かすことのできない性病予防政策の一つであり、「文明」の象徴とみなし、これを導入した。そして、こうしたセクシュアリティの管理政策から逃れたくても逃れられない女性たちを、「自由意思」によって売春する女性として再配置するための仕掛けが整えられていくことになる。

こうした近代的性管理政策を積極的に推進した第1の要因は、先述のような性病対策にあったが、社会意識の観点から見れば、そこにもまた西洋からもたらされた新しい知識によって再編成される男性セクシュアリティという要因をあげることができる。西洋からもたらされた新しい知識とは、いわゆるセクソロジーのことを指す。

明治維新时期には「開化セクソロジー」という新しい性知識が日本社会に流入しはじめ、大きな影響をさまざまな方面に及ぼすこととなる。「開化セクソロジー」により、性欲は人間にとって本能的なものという漠然としたイメージが、「性欲自然主義」という「科学的」知識となって権威を持つに至る。また、こうした「性欲自然主義」を受け入れた社会的土台に着目すべきである。明治初期から都市化の進行と都市労働者問題の萌芽が現れ、それにとまなう男性の晩婚化は、彼らの性欲の適切な処理施設が必要という主張を生み出すことになった。そしてこうした歴史の舞台に新しく登場した男性たちの性欲をコントロールするためにとられた対策の柱は、国家にとっては健全な労働力の確保であり、家庭にとってはその安定を目的とした、効率の良い性欲処理のシステム作りであった。そしてそれがいわゆる近代公娼制度という形になって確立することになる。

第2章「1910年代における禁欲主義的男性セクシュアリティ形成への動向」では、群馬県において廃娼が達成された時期以降の男性セクシュアリティの特質を分析した。1893年の群馬県の成功経験を生かし、廃娼運動が全国展開されていくことになるが、廃娼を勝ち取ったからといって、群馬県の女性たちの売春が全面的に禁止されたわけではなかった。廃娼後の婦妓たちの多くは、他府県で婦妓を続けるか、県内で類似の接客業に転業している。すなわち、この運動の意義は、売春それ自体の廃止という「理想」の実現を目指した点にあるのではなく、県内における売春の公許の撤回を達成した点にある。

群馬県での廃娼の達成は、公権力の売春統制の廃止ではなかった。いわゆる「公娼」である「娼妓」の管理システムは確かに解除されたが、売買春営業からの徴税、強制的性病検診制度は存続しており、さらには他府県にはない芸妓の性病検診まで義務づけていた。したがって、「自由意思で売春する女性」というイメージを壊そうとしたものではなく、道徳性が低いゆえに身体を管理されるべき存在としての娼婦像に変更を加えることはなかった。男性によって運営される近代国家の体面を守るため、公娼制度を否定しただけであった。

この時期の廃娼運動は、女性解放というよりむしろ、男たちによる「男らしさ」の再構築の動きであったといえる。「文明」社会の「男らしさ」は、「意志の強さ」の問題に置き換えられ、「意志」によって身体をコントロールできることこそが「強さ」であるという新しい基準が示された。こうして「自由意思」で売春する女性の誘惑を「意志の強さで」払いのけることが、「男らしさ」を示す特徴の一つとなった。したがって、こうした「意志」をそなえた男性にとって、売春婦は男性を墮落させる害悪に満ちた存在に他ならない。

しかし、こうした「男らしさ」は新しい文化の登場によって動揺することになる。本章では、

新しい性道徳ないしは新しい性知識と社会文化との関係を示す題材として、田山花袋の『蒲団』を取り上げた。この小説は、「性欲」が男性において大きな地位を占めることを、女学校という新しい機関が作り出す新たな女性の存在を前にして赤裸々に描き出すと同時に、男性個々人の内面の問題として、性欲の自制と隠蔽を身体的・精神的な側面で訓練し、規律化を推し進める、新しい家族のありかたが生まれつつあったことを示唆していた。こうした「性欲」と文化とをめぐむ問題は、1900年代になると、単に一部の若者の間の問題にとどまらず、大きな社会問題として認識されるようになった。

1899年の高等女学校令発布以降、全国で高等女学校への進学希望者は増える一方であった。全国で湧き上がる進学熱を吸収した「女学生」が、この時期以降批判の対象になったのである。ここで登場する「墮落女学生」とは、良妻賢母主義の教育が拡大していく過程で、そうした理想的な女性像から逸脱する“新しい誘惑者”として作りだされた存在であった。そして、この風紀頹廢問題に対応すべく学生の取り締まり策が強化されていった。それは、誘惑物から男子学生を隔離し性欲の発動を抑止する政策であったが、換言すれば「墮落女学生」が新しい性的関心として男性に注目されたということである。

第3章「多様化し変質する1920年代の男性セクシュアリティ」では、こうした新しい大衆文化の登場、とくに女性の変化により動揺する男性セクシュアリティの様相を明らかにした。この時期、娼婦運動における娼妓観に大きな変化が生じる。娼妓を道徳性の劣った女性として位置づける点は変わらないが、娼妓を男性にとっての害悪と捉えるのではなく、“必要悪”として再配置するようになった。たとえば、廓清会常任理事の高島米峰は、女性に対する公娼制度が無いのは「確に男が女よりも強いといふのが一つの原因」であって、「第一娼夫になるやうな下等な人間がない」と述べ、男性の方が「本能」である性欲をコントロールする道徳性がそなわっていると強調していた。こうした性差観は、男性を女性による性的「墮落」の被害者として固定し、売春婦の誘惑から男性の身を守るため公娼制度を廃止し、私娼を社会の裏側に隠さなくてはならないという、男性中心主義的な娼婦論の基礎に根付いていた。

その一方で、1920年代になると「通俗性欲学の時代」と呼ばれるほど、性に関して通俗的な雰囲気蔓延した時代が到来する。「通俗性欲学」を標榜する雑誌書籍を通じて、この時代の日本人は新しい性知識を獲得したのである。「通俗性欲学」では、社会の近代化にともない、新しい女性セクシュアリティのあり方が模索され、健康的で均整の取れた女性の身体美を賞賛する言説が数多く見られるようになる。それは、近代的な女性が社会に進出するようになったことが影響しているが、男性セクシュアリティの観点から見れば、新しい快楽を求めての「美」の追求であった。この時期「美人」論議が沸騰し、女性の身体は男性の視線から分析の対象となり、日本人女性にも西洋的裸体美の実現が期待された。

しかし、理想とは異なる女性たちの登場が、当時の男性を悩ませることとなる。同時期、女学生をはじめとした女性の性道徳の紊乱がクローズアップされ、メディアによって「不良女学生」のイメージが広められた。これに対して、学生生徒の風紀取締対策が実施されただけでなく、性教育論の重要性が強調され、「正しい」性の知識を普及させようとする動きが見られた。なによりも注目すべきは、男性における貞操の価値の相対的低さと、能動的な女性の性欲に対する男性の受動性であり、それらに対して生物学的な「科学的」根拠が与えられていた点であ

る。男性のセクシュアリティは、もっぱら「受動的」立場として女性による被害者に位置づけられていた。その一方で、女性の「能動的」セクシュアリティには、様々な男女間の不適切な行為の根本原因としての科学的根拠が付与されていた。

こうした科学的知識を土台とした性教育論においても、平等な男女の関係性は志向されていなかった。とりわけ強調されていたのは、女性の性がいかに「能動的」で「危険」なものであるか、ということであった。すなわち、新しい女性のセクシュアリティによって誘惑される男性のセクシュアリティを男性自身がいかに受け止めるか、というテーマに関し、多様化し拡散する男女間の諸問題の根を女性のセクシュアリティに置き、性に能動的な女性イメージを作り出すことによって、男性セクシュアリティを女性セクシュアリティに従属させることで自らへの責任追及を避けたのである。

第4章「頽廢化する1930年代の男性セクシュアリティ」では、1930年代におけるセクシュアリティの新たな展開を考察した。この時期の廢娼運動の担い手たちが、高い道徳性を備えている、もしくは備えるべきと見ていたのは中層・上層の男性であって、都市労働者などの下層男性については別の捉え方をしていた。とくに貧困層の男性の性欲問題はしばしば取り上げられていた。その理由は、晩婚化が労働者など貧困層を中心に進んでいたからであり、性欲を妻で解消できないことの問題性が意識されていた。そして、だれもが結婚することができる経済状況になれば、やがては買売春もなくなると強調すると同時に、こうした貧困層のセクシュアリティは、経済構造を改革し階級格差と貧困をなくすことによって、はじめて対処しうる問題と捉えていた。しかし、こうした態度は、貧困層の男性セクシュアリティの改良を当分の間断念することを表明したともいえよう。

なお、この時期の廓清会の廢娼論には、もう一つ重要な特徴がある。廓清会は、公娼制度を強制的売春のシステムとして批判する一方、こうした制度的拘束を受けていない私娼の存在を「自由意志」によるものとして黙認し、さらには「自発的」売春制度の確立までも目指した。しかし、彼らは男性の性を管理統制するために私娼の存在を必要としたのであり、それを正当化するために「自由意志」のレトリックを積極的に用いたのであった。

その背景には、1930年前後、性に関わる文化がいちじるしく荒廢したことがあった。東北地方の大凶作に加え、昭和という時代は金融恐慌とともにその幕を開けた。カフェーの「女給」による濃厚な性的サービスを満喫するような、エロ・グロ・ナンセンスの風俗が発生したのは、こうした社会背景があったからであり、蓄積された不安や不満の捌け口として、より強い刺激に人々の関心が集まるようになった。この特異な文化現象は既存の社会秩序や人間のあり方の枠組みを揺さぶるものであったが、それとともに男性を誘惑する存在としての女性の範囲が公娼に加え、私娼やカフェーやバーの女給はもちろんのこと、女学生をはじめとした一般女性にまで及び、急速に拡大していくことになる。

これにより、貧しい男性が貧しい女性の性を買うという従来の買売春に対する認識が否定され、女性の性は上流階層をも含んで多様化・大衆化するとともに「商品化」されていく。その一方で、それらに誘惑される男性もまた、「大衆」としての学生や生徒、そしておびただしい数の労働者に加えて一定の地位ある職業の男性も含まれるようになり、「誘惑される男性」の範囲も急速に拡大していく。この文化現象は社会の大衆化が進行したことにより発生したもの

であり、どのような階層の女性のセクシュアリティも誘惑物として取り込まれ、どのような階層の男性のセクシュアリティもそれによって誘惑される存在として、男女のセクシュアリティの再構築がなされることとなったのである。

第5章「戦争と男性セクシュアリティ」では、第4章までで明らかにしてきた男性セクシュアリティが、第二次世界大戦の中でどのような形になって表れたのかを考察した。1920年代から1930年代にかけて急速に進んだ「性知識」の氾濫と、階層間で分離されていた「性道徳」の壁の崩壊は、従来のセクシュアリティの秩序を一挙に崩壊させた。そしてそれが戦時期における様々な性暴力へと結びついていったのであった。戦時における男性セクシュアリティは、しばしば女性への性的搾取や性暴力として顕在化することが多い。第二次世界大戦の場合を見ても、戦地や駐屯地周辺において、強姦や慰安婦をめぐる問題などに男性セクシュアリティの姿が顕著なかたちで現れている。本論文では、日本の総力戦体制下において、男性には戦争する身体を、女性にはそれを支えるため男性の健康を管理するとともに、自らの健康を管理し性病を拡大させないことが求められた点に着目した。さらに、女性には男性を「慰安」という役割も期待されたのであった。

当時の日本兵の多くが性暴力に罪悪感をもたず、自己の犯罪行為を正当化していた精神構造の基底には、「突撃」を理想とする軍隊教育、すなわち死ぬことの強制があったと考えられる。「戦死を強制」された兵士たちは、その運命と当時の日本社会の男性セクシュアリティとが重なりあって、「女性を知ったから男として悔いなし」などといった、戦死すべき自己の宿命を諦めるための戦時期特有の男性セクシュアリティを構築したと言える。

以上、章ごとの考察内容の概略を記したが、最後に本研究の成果を4つの分析課題に即して簡潔にまとめる。(1)の「公娼制度を必要とする思想の特質」に関しては、都市部を中心に男性労働者の未婚率が上昇し、そうした男性の性への対応および性病の防波堤としての役割が公娼には期待されていたこと、その一方で公娼を道徳的に劣った女性として位置づけ、理想的な女性像から排除することによって、はじめて近代的な良妻賢母主義思想が確立し得たことを明らかにした。

(2)「娼娼運動が掲げる性道徳の質的変遷」については、女性に関して言えば、売春を強制された“不幸な女性像”から、自ら進んで売春する“性道徳の劣った女性像”へと転換していったことを明らかにした。そして、こうした娼娼観の変化に応じ、男性については“性道徳を改良すべし”という姿勢から、“女性の誘惑を振り払うのは道徳の力では困難”という態度に転換したことを明らかにした点は重要である。すなわち、娼娼観の変化が男性のセクシュアリティに変化をもたらしたのであった。(3)「性科学における知識の特質と大衆への浸透程度」については、まず娼娼観の変化は、性科学を通じて女性の身体に関する知識が社会の中で膨張していくことによって生じたことを明らかにした。そして、女性の身体に対する“科学的”な解釈が、娼娼だけではなく一般女性のパーソナリティをも規定していったことを指摘している。(4)「性道徳・性知識啓蒙活動活発化の背後で生まれた新しい文化」に関しては、こうした娼娼観・女性観の大きな転換が、女性の「性の商品化」を大衆レベルで促し、“常に女性に誘惑される男性”としての位置づけが確立されたことを明らかにした。このように、女性のセクシュアリティの捉え方が変化していくなかで買春する男性セクシュアリティが作り出されていく歴史的構

造を究明している。

4. 総評

本論文は、近代日本における男性セクシュアリティが、どのような過程や論理で形成され、またその特徴はどのようなものであったのかについて、性に関わる「道徳」や科学的「知識」を分析の軸として、実証的・総合的に解明しようとした意欲的な研究である。先行研究の丹念な読み込み、史実に基づいた豊富な資料の分析と考察、そして論理的な展開によって課題を追究し、高い水準の成果を導き出した論文と言える。とりわけ「男性セクシュアリティ」という独自の視点から深く掘り下げ、その課題意識を一貫させて、性と人間形成に関して豊かな理解と洞察によって研究をまとめたことは、本論文の優れた点として評価したい。

本論文の主要な意義は次の4点にあると考える。第1に指摘すべき点は、研究対象と研究視点の斬新さである。本論文が取組んだテーマは、性やセクシュアリティの視点から近代日本の人間形成史を描き出すことにあり、教育史研究として重要な視点を提示したと評価できる。すなわち、性やセクシュアリティは人間形成を考える上で不可欠の要素でもあるにもかかわらず、従来の教育史研究においてこれらの問題は等閑視されてきた。教育活動の中にセクシュアリティについての「知」や「言説」を見出し、それを分析・考察することが「セクシュアリティと教育」研究の課題とされているが、近代日本の男性セクシュアリティの形成とその特徴を究明するために、性道徳と性知識を柱として、教育史的にアプローチした本論文は、教育史研究の分野に新たな領域を開拓したと評価することができる。

第2に、性やセクシュアリティの問題に男性性の形成という視点から迫ったことで極めて意義深い研究となっている。本論文は、単なる男性セクシュアリティへの着目ではなく、男性のセクシュアリティ言説をさまざまな角度から丹念に洗い出すことで、女性のセクシュアリティ言説との関係をも明らかにしている。その意味で、男性セクシュアリティに焦点を絞りながらも、これまでの男性学・男性史をさらに越えようとする、まさに男女の関係性を問うジェンダー史研究としても意義あるものである。同時に、従来の教育史研究が明らかにしてきた良妻賢母主義の教育理念についても、これを支えた性認識の構造を徹底的に解明したことで、その本質の意味が明らかとなり、良妻賢母主義教育研究の新たな地平を拓いたものと評価できる。

第3の意義は、考察の結果として新しい知見を示した点である。全体としては、売春や性暴力を「男性の問題」として再確認し、さらには廃娼運動を男性運動という観点から捉えなおし、それらを豊富な資料の分析と考察によって明らかにした点に意義が認められる。この他に本論文が示した新しい知見は数多いが、それらは上記の「考察の結果と総括」の部分に記したため、ここでは要点だけを示す。「廃娼運動が掲げる性道徳の質的変遷」については、娼婦観が売春を強制された“不幸な女性像”から、自ら進んで売春する“性道徳の劣った女性像”へと転換したことを指摘し、こうした娼婦観の変化に応じ、男性のセクシュアリティに変化がもたらされたことを明らかにしている。また「性科学における知識の特質と大衆への浸透程度」では、娼婦観の変化は性科学を通じて女性の身体に関する知識が社会の中で膨張したことによって生じたこと、そして女性の身体に対する“科学的”な解釈が娼婦だけではなく、一般女性のパーソナリティをも規定していったこと明らかにした。こうした娼婦観・女性観の大きな転換

が、女性の「性の商品化」を大衆レベルで促し、“常に女性に誘惑される男性”としての位置づけが確立されたことを指摘している。そして、女性のセクシュアリティの捉え方が変化していくなかで買春する男性セクシュアリティが作り出されていくその歴史的構造を究明している。

第4の意義として指摘すべき点は、資料について徹底的な収集・整理・分析を行い、歴史研究の手法を十分に踏まえた、学術性の高い論文となっている点である。すなわち、性についての学術書、雑誌、文学作品などの丹念な資料調査を行うとともに、それらを精緻に分析し、実証性に徹するという真摯な姿勢が論文全体に貫かれており、このような研究姿勢が論文の価値を高める要因となっている。研究に用いた資料群は巻末にまとめられているが、資料収集に対する筆者の熱意は「情熱的」ともいうことができ、その一例として国立国会図書館などにも体系的には所蔵されていない、澤田順次郎主幹の雑誌『性』・『性公論』や秋山尚男主幹の雑誌『性と愛』、さらには山形県のある貸座敷の『遊客人名簿』などを独自に入手し、これにより新たな事実を発掘して、論証に深みをもたらしていることを挙げるができる。さらには、本論文は歴史研究に望まれる高い実証性を備えているだけでなく、精緻な考察を加えた論理的で理解し易い文章でまとめられている点でも、学術性の高い論文と評価できる。

この他、統計的数値をまとめた表を多用し、読者の理解を容易にしている点、巻末に年表を付して明治初年から1945年までの近代日本の男性セクシュアリティ史を概観できるように配慮している点も、本論文の価値を高めるものといえることができる。

最後に、本論文の今後の課題について記す。第1に、各課題や各章の考察で明らかになった男性セクシュアリティのありようについて、より構造的な繋がりを明らかにすることが望まれる。そうすることによって、形成過程や時代的特質だけでなく、男性セクシュアリティの日本的特質の全体像をより明確な形で提示することができたといえよう。第2に、本論文では男性の廃娼運動家や性科学者の言動が分析対象の中心とされ、彼らの語りの中から男性セクシュアリティの特質を描き出すことに成功している。しかし、女性の運動家や思想家の言動と対比させたならば、一層その特質を浮き彫りにできたものと考えられる。以上の課題の中で、第2点は本論文の発展的な課題に位置づくものでもあり、この点の究明も含めた今後の研究の進展に期待したい。

以上により、審査員一同、総合的に判断して本論文が「博士（教育学）」を授与するに十分に値するものであるとの結論に達したので、ここに報告する。